A 121　江戸時代中期の名古屋の食生活 ― 鸚鵡籠中記より考察 ―　(1)

愛知学泉女子短大　竪山翠

鸚鵡籠中記は、尾張藩士、朝日定右衛門重章が元禄4年(1691年)より享保2年(1717年)までの26年間にわたって書き記した日記である。近年、この日記が高く評価されるようになったのは、ここに記されている内容が元禄を中心とする世相史であり、更にその範囲が尾張藩のみならず、江戸、京都はもとより、伊勢、伊豫、南部盛岡までにも及ぶ他藩で起きた出来事をも、彼が藩士として知り得たり、又世間ばなしで聞いたニュースに至るまで、かなり詳細に書き記されている点である。日記の全体を通じて特に細かく記録されているのは毎日の気象、飲食に関する記事、藩士の任免に関する事柄である。

目的　日記中、食事に関する記載では、彼自身の婚礼の時の献立記録、芝居見物の折、茶店での外食献立、又四季折々親類が集って親睦を深める〃親類振舞〃の食事内容など、どの項目を取りあげても当時の名古屋の食生活を知る上での貴重な資料である。しかし日常の食生活についての記載は少なく、下級武士の食生活の全貌を明らかにすることが困難である。

方法　それで今回は日記の中より、日常の食事と思はれる記載をひろい出し、他の文献とも照合しながら、元禄期の名古屋の下級武士の日常の食生活内容を推察することとした。

結論　元禄6年1月19日、『夙起食す。三盃。汁及牛蒡くずし』同年7月16日『不断の膳を給う。汁鳥(塩也)椎茸牛蒡、煮物くしこが牛蒡・かんひよう、香の物』とあり、日常は飯と汁、又は飯と汁と煮物の組合せが主であった。汁の実には、塩鳥、塩鯛などの動物性食品がよく使用されており、名古屋の武士の日常食は実質的で恵まれた内容であることが分った。